

桜蔭俳話会 五月句会(第三〇五回) 桜蔭会館

平成二十四年五月二十七日(日)

5点②二階から素直な返事豆御飯 秀一

①雑草の命したたか夏来たる 溪水

3点②一瞬の宙の金環朴の花 守

鬚やつと結へて序二段若楓 貞勝

母の日やあらがひし日の遠かりき 友子

2点①金環食一点へ向く初夏の街 ヤエ子

青葉木菟鳴きてこころの荒野かな 守

父の日の父へ読み上ぐ手紙かな 守

登校のふたり石蹴る夏木立 秀一

氷川丸に遠き戦歴冷菓囃む 貞勝

青嵐スカイツリーの芯柱 守

新緑の谷の底より湧き上がる ツル子

ささら風植田に走り散居村 貞勝

たんぼぼや黙して意思を貫く子 ヤエ子

1点①ダイアナてふ薔薇へ近づく鼻の数 友子

鷺草の飛び立つ構え風を待つ 幸

天をつく塔に五月の風昇る ツル子

鯉のぼり相模はでかい海と山 貞勝

御馳走の皿へ仕上げの山椒の芽 友子

浜薄暑祈りの中の人の影 守

丸刈りの羊一頭草萌ゆる 幸

ジーンズの和尚たけのこ掘つており 友子

忽然と電車近づく花菖蒲 秀一

力士鬚たつぷり黒々五月来る 貞勝

菊根分時計の針は二廻り 幸

ととのひし庭にひときは夏紅葉 真三

万緑や修験道の杉木立 幸

夕立や駅の出口に人の波 溪水

せがまれし影ふみ遊び夏めきて ツル子

睡蓮の花満開や夕日の塔 幸

老木も若葉まといて頼もしく 溪水

亀の甲は銀色や里若葉 ヤエ子

初夏西瓜心づくしのうましかな 真二

丁寧の心のこもる初夏めぐり 真二

春の夢一駅の間につみる ヤエ子

葉桜や高き低きの背番号 秀一

代掻の終へし車窓に風光る ツル子

老年のハイカー元氣山そこに 溪水

(不在投句 野上貞勝、瀬戸溪水)

※夏場所の力相撲に元気づき 真三

夏めくや雲の切れ間の金環食 友子

明神に深き一礼春暮れる ヤエ子

湖のみどりに浮び五月富士 溪水

ぼうたんに酔ひし絵筆の止まりをり ツル子

夏帽子金環日食決まりけり 秀一

快適の一語につきる五月尽 真三